二代目市川團十郎の日記詳解　第六回
（享保十九〔一七三四〕年五月十九日～二十九日）

BJÖRK, Tove Johanna *

【要旨】本稿で、享保期江戸歌舞伎界で活躍した二代目市川團十郎（元禄元〔一六八八〕年～宝暦八〔一七五八〕年）の日記を読解する。文献が少ない享保期における貴重な資料でありながら、これまで分析されることがなかった二代目團十郎の日記には、舞台制作の詳細はもとより歌舞伎役者の日常生活が縷々綴られている。これらを読み解くことで、当時の歌舞伎役者のありのままの姿を、また歌舞伎界の転換期とされる享保期江戸歌舞伎の実態を解明していく。

キーワード：二代目市川團十郎、歌舞伎、俳諧

はじめに

享保期江戸歌舞伎界で活躍した二代目市川團十郎（元禄元〔一六八八〕年～宝暦八〔一七五八〕年）が記した日記について注を付し、解説する。

日記本の成立や特徴、注釈書の概要、本稿の意図については第一回を参照。これまでの掲載は以下のとおり。

第一回（享保十八〔一七三三〕年十二月三十日～同十九〔一七三四〕年一月二十七日）（『埼玉大学紀要　教養学部』第五二巻第二号）

第二回（享保十九年二月十日～三十日）（『埼玉大学紀要　教養学部』第五三巻第一号）

第三回（享保十九年三月三日～十九日）（『埼玉大学紀要　教養学部』第五三巻第二号）

第四回（享保十九年四月三日～五月五日）（『埼玉大学紀要　教養学部』第五六巻第一号）

第五回（享保十九年八日～十五日）（『埼玉大学紀要　教養学部』第五七巻第二号）

凡　例

一、日記原文は『資料集成二世市川団十郎』（和泉書店、

* ビュールク・トーヴェ・ヨハンナ、埼玉大学大学院人文社会科学研究科・教授

一九八八年刊）による。本稿では日記原文はゴシック体で、注は八ポイントで記した。

二、日記原文冒頭の記号▽○●△▼は写本を示す。

写本一覧

▽「老のたのしみ」
○「柿表紙」
●「柏筵日記」
△「病中日記」
▼「市川團十郎日記発句集」

三、「老のたのしみ」「柿表紙」「柏筵日記」には注釈書がある。日記原文の該当字句に対する注をすべて「」でくくって引用し、注釈書名を略号〈　〉で示した。

注釈書一覧

岩本活東子注「老のたのしみ抄」（『燕石十種』文久元〔一八六一〕年編、市島謙吉活字編明治三十九年〔新版中央公論社、一九八〇年刊〕）〈老岩〉
内藤耻叟・小宮山綏介注「老の楽」（『温知叢書』博文館、明治二十四年刊）〈老内〉
博文館編輯局校訂「老の楽」（『校訂俳優全集』博文館、明治三十四年刊）〈老博〉
郡司正勝註「老のたのしみ抄」（『近世芸道論』日本思想体系〔六一〕、岩波書店、一九七二年刊）〈老郡〉
伊原青々園注「柿表紙」（『栢莚遺筆集』、大正六年写、早稲田大学演劇博物館蔵）〈柿〉
伊原青々園注「栢莚日記」（『栢莚遺筆集』、大正六年写、早稲田大学演劇博物館蔵）〈栢〉

四、引用文の約物は省略した。

五、出典記載のない役者評判記は『歌舞伎評判記集成』（岩波書店、一九七二～一九七七年刊）から引用した。

六、出典記載のない注は『日本大百科全書』『日本国語大辞典』『仏教語大辞典』『日本人名辞典』『世界文学大事典』『歌舞伎事典』『国書人名辞典』を参照した。

七、日記原文の注番号は漢数字を、解説注文の注番号はアラビア数字を用いた。

八、俳諧の季語は「季・春」などと表記する。

本稿は早稲田大学演劇博物館・演劇映像学連携研究拠点研究課題「日記から考える歌舞伎役者を中心にした江戸中期の文芸圏研究」の交付を受けて制作された。

【日記詳解】

〇十九日　夜六ツ過　大雨電雷モ鳴リ　シバラクシテヤム　其節大久来リ噺シ居タリ[一]

五月雨ヤセメテ見アカヌ妻ノ顔[二]　**才牛**

雪ホドニ藪モフシタリ五月雨　里郷[三]　**傍点〔▼才牛〕**

一　大久　大黒屋久左衛門。享保十九年正月二十七日▽第一回参照。

二　妻　二代目團十郎妻のお才。生没年未詳。俳号翠扇。宝暦四（一七五四）年頃、二代目團十郎の妾おしゅんと二代目團十郎の弟子市川兵蔵が駆け落ちしたとき、お才は兵蔵に手切れ金を渡し、おしゅんを連れ戻した（池須賀散人著『市川栢莚舎事録』明和六〔一七六九〕年）。お才は二代目團十郎の妾の面倒を見るほど二代目團十郎と仲が良かった。

三　里郷　「大久ノ俳名カ（否、両人がくる話ハ十月九日を見よ）」「〇再考原盛和丈の『隣の疝気』に里郷の名あづ、仕切場の人名に挙げる、『昔は一ゑんさいと、むねき平右衛門、吹屋町にても庄右衛門、市右衛門、堺町留場里郷など残りて、黒羽二重の小袖』と云」〈柿〉「市村座の支配人か」〈郡〉。里郷は生没年未詳。歌舞伎劇場の木戸番か。注にある『隣の疝気』（原盛和著、宝暦十三〔一七六三〕年成立）は享保期、江戸で活躍する人物を紹介した随筆集。ここに里郷、一ゑんさい、むねき平右衛門、庄右衛門、市右衛門ら歌舞伎劇場の木戸番が登場する。享保十九年五月十四日〇第五回参照。

解説

大黒屋久左衛門は葺屋町の芝居茶屋の亭主で、二代目團十郎と日頃から付き合いがあった。大山の温泉旅行から帰った久左衛門は、二代目團十郎に土産話を聞かせ、[1] また享保十九年六月二十一日には二代目團十郎の目黒の別荘に泊まるほど親しかった。[2]

〈句意〉　五月雨だなあ。（長雨でずっと家にいなければならないが）妻の顔を見飽きることがない（のがせめてもの救いだ）　才牛

〈句意〉　雪が積もったように竹が伏している（それほど強く）五月雨が降る　里郷

「雪ホドニ」の句は、日記本『柿表紙』〇では里郷の句とされているが、発句集『市川團十郎日記発句集』▼では才牛の句となっている。『市川團十郎日記発句集』▼は、『柿表紙』〇『栢莚日記』●『老の楽しみ』▽の発句を集めたものなので、転記の際に誤ったのだろう。

1　享保十九年五月十四日〇第五回参照

2　享保十九年六月二十一日〇参照

▽報恩謝徳闘諍集[一]と云本あるよし　是は曾我物語[二]の箱根本[三]と云物にてはなきかと　須原屋清二郎[四]物語　松諏訪殿[五]の本の由　箱根本と云は御文庫におさまり有故　外にては此名あるかと清二郎はなし也

一　報恩謝徳闘諍集　『曾我物語』の真字本と大石寺本が『報恩謝徳闘諍集』の副題をもつ」（老郡）。『曾我物語』の真名本別称（拙著『二代目市川團十郎の日記にみる享保期江戸歌舞伎』文学通信、二〇一九年、第一章参照）。

二　曾我物語　軍記物語。歌舞伎では「曾我物」と呼ばれる諸作品のもとになる作品で、謡曲・幸若舞・浄瑠璃・歌舞伎などに素材を提供している。

三　箱根本　曾我五郎が箱根権現で修行した話を中心にした本か（拙著『二代目市川團十郎の日記にみる享保期江戸歌舞伎』文学通信、二〇一九年、第一章「二代目團十郎の読書体験と演技・演出」参照）。

四　須原屋清二郎　「後ニ出（本屋ならん）」（柿）、「日本橋二丁目の本屋」（老郡）。本屋須原屋の関係者か。享保十九年八月十七日〇にも登場する。須原屋は江戸の版元・書店。創立者は須原屋茂兵衛。家号は千鐘房。北畠宗元が万治年間（一六五八―六一）に江戸に出て初代茂兵衛となったと伝えられる。貞享・元禄のころから学問書・教養書の出版をはじめ、やがて武鑑類、江戸絵図類の板株（板権）を獲得し、江戸最大の版元・書店となった。須原屋一門の店は、文化十四（一八一七）年で、江戸書物屋仲間六十三軒中十二軒、また、享保十二（一七二七）年から文化十一（一八一七）年までの須原屋一門の出版物・販売物は二千二百三十三点以上にのぼった。明治三十七（一九〇四）年、閉店。

五　松諏訪殿　「松胤坊殿」（老岩）。松平忠輝か。松平忠輝は文禄元（一五九二）年生、天和三（一六八三）年没。江戸前期の大名。初代将軍徳川家康の六男。母は茶阿局。幼名辰千代。慶長十五（一六一〇）年、越後高田（上越市）城主となり六十万石を領した。酒におぼれ、暴虐のふるまいがあったといわれる。元和元（一六一五）年、大坂夏の陣に参加すると、近江守山で部隊の前を通った将軍の旗本二人を殺し、さらに大坂方との戦闘に遅れたことを理由として、翌年後領地を没収されて伊勢朝熊（現三重・伊勢市）に流される。ついで飛騨高山、信濃諏訪へと転じ、没。墓は諏訪市貞松院。

解説

二代目團十郎は『吾妻鏡』や『平家物語』など歴史書、また軍記物を数多く所蔵し、しばしば珍しい書籍について日記に書き記した。[1] 須原屋清二郎は享保十九年八月十七日〇にも『曾我物語』の写本を持参。二代目團十郎は高価な書籍も購入したため、[2] 書店の者はしばしば二代目團十郎のもとを訪れたのだろう。

1　享保十九年三月四日〇第三回参照。

2　「殊の外大金の掛りし集也」（池須賀散人著『市川栢筵舎事六』天明六〔一七八六〕年）

▽廿一日　雨ふる　予芝居[一]より帰り　座敷にて人参をきさむ　むかふに小屏風さほしの為出しをく[二]　屏風は一蝶[三]牛馬の画[四]也　予が好みにて行年書[五]也　七十一歳と有予つく〳〵と思ふに　予は今年四十七歳也　一蝶の年にくらふれは今年より廿五年生きて七十一歳也　しかれはたのもしき事也　七十一歳にて画の筆の至極出来言にのへかたし　まことに名物の述芸[六]也　常に生をやしなはゝなと七十一迄生きぬといふ事やあるへき　飲食酒色気のもち様　工夫可有事とも也　其夜升五郎[七]は龍水[八]へ手習に行　枡車[九]方より団扇来る　其外大文字[十]ともかす〳〵けいこに行[十一]　樹車[十二]か方よりのうちわの賛[十三]発句　柳に蝶　其翌枡車方より取に来る　発句かゝすに返す

葉底[十四]の花は柳[十五]に胡蝶[十六]かな　徳弁[十七]

一　芝居　当時二代目團十郎が勤めていた市村座。このとき通打治兵衛・九平次作「八棟菖源氏」を上演、二代目團十郎は平安時代の武将猪の早太を演じた。

二　さほし　「サボシ　出シ」〈柿〉、「某の為出し」〈老岩〉〈老内〉〈老博〉「さぼしの為」〈老郡〉さぼし、晒、曝。日にあててほすこと。虫干し。

三　一蝶　「楓窓接翠蓑翁謫居十二年宝永六年帰郷して後英一蝶と称し享保七年七十一歳なり」〈老岩〉〈老内〉。英一蝶。承応元（一六五二）年生、享保九（一七二四）年没。画家。英派の祖。名は安雄、のち信香。字は君受。別号隣樵庵・北窓翁など。俳号、暁雲。京都生まれ。狩野派から風俗画へと転じ、洒脱な描写で風俗精神を表現した。幕府の忌諱にふれ、遠島に処されるも江戸に戻り、晩年は主に花鳥画、風景画を描くようになった。代表作「朝暾曳馬図」「四季日待図巻」など。

四　牛馬の画　未詳。

五　行年書　ぎょうねんがき。書画の落款に、年齢と姓名を書き入れたもの。

六　述芸　「術芸」〈柿〉。「高安本『達芸』」〈老郡〉。術芸。技術と学芸。また、技芸。

七　升五郎　「後二三世團十郎徳弁」〈柿〉「次の徳弁は市川升五郎なり」〈老博〉。三代目團十郎。第二回享保十九年二月十八日〇参照。

八　龍水　「龍水は勝間氏書家也」〈老岩〉〈老内〉。勝間龍水。書家。享保十九年五月十日〇第五回参照。

九　枡車　未詳。

十　大文字　だいもんじ。雄大な文章。すぐれた文章。この頃、若衆役者はしばしば舞台上で書を披露した。当時十三歳だった三代目團十郎も書を得意とした（享保十九年二月十八日〇第二回参照）。

十一　かす〳〵　数々。

十二　樹車　未詳。

十三　賛　絵のかたわらに、その絵を題として、あるいはその絵にちなんで書かれた詩、歌、文章。画賛。

十四　葉底　ようてい。葉の下。葉の奥。白居易は七言律詩「和雨中花」で「（前略）花能幾日供攀折、桃李無言難自訴、黄鶯解語馮君説、鶯雖爲説不分明、葉底枝頭謾饒舌」（花能く幾日か攀折に供する。桃李言ふこと無

ければ自ら訴へ難し、黄鶯語を解すれば君に馮みて説かしむ、鶯は説くことを爲すと雖も分明ならず、葉底枝頭は謾りに饒舌（『白氏文集』巻五十二・二二六八）、桃や李は何も語らず、黄鶯は君に説明させる。鶯は説明するが意味が通じず、葉底と枝頭はおしゃべりしている（緑川英樹著「雨中の花：陳與義の詠雨詩と杜甫」『中国文学報』八十五号、二〇一四年）。享保の改革では漢学が奨励され、楊貴妃と玄宗天皇の恋を語る白居易作『長恨歌』を元に歌舞伎もしばしば上演された（「小栗長生殿」享保十（一七二五）年十一月、中村座、「長生殿白髭金時」享保十四（一七二四）年十一月、市村座他）。二代目團十郎は白居易の訳詩集『歌行詩諺解読』（著者不明、貞享（一六八四）元年刊）を所有していた（享保十九年九月八日〇参照）ことから、三代目團十郎も白居易に親しんでおり、この日は雨天だったことから「葉底」を選んだか。

十五　花　藤か。白居易「和雨中花」の花は特定できないが、有原業平作「弥生のつごもりの日　雨のふりけるに　藤の花を折りて人につかはしける　濡れつつぞ　しひて折りつる、年のうちに春はいくかも　あらじと思へば」（『新古今和歌集』春歌下、一三三、新編古典日本文学全集第四十三巻、小学館、一九九五年刊）を初め、平安時代より藤の花は「雨中の花」として詠まれるようになった（久保瑞代著「在原業平における白居易詩の受容―『古今集』における『雨中の藤花』の詠」『言語表現研究』三十二号、二〇一六年）。ここでは三代目團十郎も藤の花としたか。

十六　柳　季・晩春。芭蕉句「八九間空で雨ふる柳かな」にあるように、俳諧では柳は雨を連想させる。

十七　胡蝶　江戸初期、夢に見ている胡蝶と目覚めている自分のどちらが現実であるのかがわからないという荘子（道教の始祖、紀元前三六九年頃生、紀元前二八六年頃没）の『胡蝶の夢』が広く読まれた。元禄期には注釈書『荘子口義大成俚諺鈔』（毛利貞斎作、元禄十六（一七〇三）年刊）が、享保期になるとパロディ本『田舎荘子』（佚斎樗山作、享保十二（一七二七）年刊）が出版された。また、室町時代の謡曲「胡蝶」、江戸時代の歌舞伎「四季御所桜」（元禄八（一六九五）年十一月、市村座）や「寿紅葉景政」（元文三（一七三八）年十一月、河原崎座）に所作演目「胡蝶の夢」などがあり、よく知られるようになった。俳諧では、胡蝶は雨の日は飛ばずに寝ているから夢に現れると解釈されている（加賀千代女句「雨の日はあすの夢までこてふ哉」『俳諧松の聲』宝暦十三（一七六三）年刊）。三代目團十郎もこれを踏まえて胡蝶を詠んだか。

十八　徳弁　三代目團十郎の俳号。注七参照。

解説

二代目團十郎は定期的に屏風や掛け軸、和本を虫干ししていた。[1] また二代目團十郎は養生についてよく記し、[2] 一蝶と同じく七十一歳まで生きた。

この頃、歌舞伎役者が舞台上で文字を書く演技が流行、三代目團十郎は書を得意としたため、揮毫[3]の依頼が多く届くようになった。こうした習慣は、歌舞伎役者と贔屓客の付き合いの重要な一部だった。[4]

〈句意〉　未詳。雨の日に三代目團十郎が詠んだ句。

1　「扨毎年書物虫干とて蔵より取出し自身指図を以て申付干ける」（池須賀散人著『市川栢筵舎事六』天明六年）

2　享保十九年五月一日〇第四回など参照。

3　歌舞伎常連だった大和郡山藩藩主柳沢信鴻もしばしば役者に揮毫を依頼した（柳沢信鴻著『宴遊日記』安永三年十一月二十一日など、芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成』第十三巻〔三一書房、一九七七年〕収録）。

4　拙稿「安永期の江戸の芝居茶屋と水茶屋―柳沢信鴻の日記から―」（『歌舞伎―研究と批評』第六十七号、二〇二二年）

〇姨捨山[一]勢至堂[二]ノ壁ノ額　池庵[三]　佐玄龍[四]書

一　姨捨山　長野県中北部、戸倉町と上山田町の境にある冠着山の別名。古来観月の名所で「田毎の月」で知られる。

二　勢至堂　勢至菩薩が奉納された堂。勢至菩薩とは、阿彌陀三尊のひとつ。阿弥陀仏の右の脇士で、智慧の光で一切を照らし、衆生をして餓鬼・畜生・地獄の三悪道から救い、臨終には来迎して極楽に引導するという。謡曲「姨捨」では、姨捨山に捨てられた老女の霊は勢至菩薩の前で舞う。

三　池庵　佐々木池庵か。佐々木池庵は慶安三（一六五〇）年生、享保七（一七二二）年没。名は玄龍。字は煥甫。通称は万次郎。佐玄龍とも幕府に仕え、弟文山とともに唐様、朝鮮系の書体で知られ、来日した朝鮮通信使らと詩文をやりとりした。門人に宝井其角・後藤仲龍らがいる（三村竹清『近世能書傳』二見書房、一九三〇年）。

四　佐玄龍　佐々木池庵の別名。

解説

書に関する記述が多く見られる。[1] 佐々木池庵の額の内容については未詳。

1　書家池永道雲の一行物など、享保十九年五月十日〇第五回参照

▽朱引[一]の歌　右所中は人の名　左官中には書の名　左には年号

一　朱引　漢籍を読む際、地名・国名・人名・書名などを普通名詞と区別するために字の左右や中央に朱線を引く。室町時代以降に一般化し、江戸時代に、漢籍に書き入れられる朱引の手法を案内する歌としては太宰春台著『倭読要領』（下巻、享保十三〔一七二九〕年刊）に「右所（ミギトコロ）、中（ナカ）ハ人ノ名、左官（ヒダリカン）、中ニ（ナカニ）ハ書ノ名、左ニ（サニ）ハ年号」が紹介される。太宰春台は延宝八（一六八〇）年生、延享四（一七四七）年没。幕府に仕えた儒学者荻生徂徠の弟子。

解説

この「朱引の歌」の出典は不明。漢籍の入門書『倭読要領』に紹介されているが、二代目團十郎が本書を所有していたかは未詳。

○武州[一]菅尾[二]名主田沢源兵衛[三]　同苗源太郎[四]　同卯ノ木[五]名[六]天明五郎右衛門[七]　品川行願寺[八]ノ所化[九]玄理坊[十]　終南山光明寺[十一]卯ノ木ノ光明寺ト云府中[十二]ノ額[十三]　惣社[十四]六所宮[十五]　安養寺[十六]ト云寺アリ　タヌキシヤウギヤウ[十七]アリ　矢口村[十八]義興山真福寺[十九]新田大明神[二十]

一　武州　武蔵国の別称。現在の東京都・埼玉県および神奈川県の東北部。

二　菅尾　「菅生カ」〈柏〉。地名。神奈川県川崎市宮前区菅生。享保十六（一七三一）年、東海道品川宿の助郷（補助的に人馬役「旅人の籠を運ぶ人夫や荷物を運ぶための馬を用意する人」を課す村）となる。

三　田沢源兵衛　菅生の名主。

四　同苗源太郎　菅生の名主。

五　卯ノ木　「鵜ノ木」〈柏〉。地名。東京都大田区の多摩川左岸にある鵜の木村。

六　名　「主ヲ脱カ」〈柏〉

七　天明五郎右衛門。鵜ノ木村の名主。

八　行願寺　願行寺か。願行寺は東京都品川区にある浄土宗の寺院。奈良時代中期、行基によって開山されたといわれている。

九　所化　修行中の僧。また広く寺に勤める役僧をいう。

十　玄理　未詳。

十一　終南山光明寺　「昭和十二丁丑五月二十三日光明寺へ行く　大明姓の墓多く」「前川姓の家今三十余戸ある由」〈柿〉。大田区鵜ノ木の大金山光明寺か。この注は、伊原清々園が日記本「柿表紙」○を書き写した大正六（一九一七年）年の二十年後の昭和十二年、光明寺で現地調査を行ったことを示している。

十二　府中　地名。現・東京都府中市。多摩川の北岸にあり、大部分を武蔵野台地が占める。古代には武蔵国が置かれ、江戸時代には甲州街道上石原（現東京・調布市）と日野市との間の宿場町・市場町として栄えた。

十三　額　「此額ハ廣澤ノ筆也」〈柿〉。廣澤は細井広沢か。細井広沢は万治元（一六五八）年生、元文元（一七三六）年没。儒学者・書家。朱子学・陽明学を修め、また、唐様書道を広めた。柳沢吉保に仕え、歴代天皇陵の修築に尽力した。

十四　惣社　国々の各所の神社を一所に勧請した神社。国を治める者による奉幣や社参の便をはかるため古代から国府近く所在し、社寺境内に設けられることもある。

十五　六所宮　惣社（注十四参照）に一か所に設置された神社や寺院のこと。

十六　安養寺　「古川薬師も安養寺なれど、コヽのは府中にある四名の寺と也、六所宮の南辺になる」〈柿〉。安養寺は六所宮（注十五参照）の南にあった四つの大きな寺院の一つ。東京都府中市にある天台宗の寺院。山号は叡光山。貞観元（八五九）年、円仁（慈覚大師）によって開山されたという。永仁四（一二九六）年に再興し、明治維新前は武蔵総社大國魂神社に付属して置かれた。

十七　タヌキシヤウギヤウ　未詳。安養寺（注十六参照）には、狸が僧侶に化ける伝説が伝わる（府中市編『府中市史』府中市史編纂委員会、一九七四年）。

十八　矢口村　現東京・大田区の南西部。

十九　義興山真福寺　東京・世田谷区用賀にある真言宗智山派の寺院。創建

は天正年間。開山は法印宗円和尚。

二十　新田大明神　「真福寺ハ新田大明神の脇南」〈柿〉。大明神は東京・大田区矢口にある神社。創建は南北朝時代正平・延文年間。祭神は新田義興。義興が矢口村で殺され、のちに新田大明神として奉られるようになった。

解説

府中の光明寺、品川の行願寺の額について記されているが詳細は不明。

○享保九辰ノ年極月十日ノ夜ノ明方明レバ十一日ノ朝

夢想

蠟燭マモルコクウゾウ菩薩一

大誓然廓信士二　元禄十二卯年四月三日

忍誓永生信女三　同年三月十五日

一　クウゾウ菩薩　虚空蔵菩薩。宇宙のすべてのものを含み、虚空（大空）のように無量の福徳・智慧を具え、これをつねに衆生に与えて諸願を成就させる菩薩。また、大日如来の福と智の二徳を本誓（根本の誓願）とするため、同体とする菩薩が多い（『国史大辞典』）。

二　大誓然廓信士　男性の法名、未詳。

三　忍誓永生信女　女性の法名、未詳。

解説

日記本「柿表紙」○は享保十九（一七三四）年以降の記録がまとめられているが、ここではその十年前の享保九（一七二四）年のことが書かれている。二代目團十郎が十年前のことを思い出して書き留めたものか、あるいは、前出府中光明寺の額に書かれていたものかは未詳。

○廿四日ノ朝　廿三日ヨリ雨強クフリテ　暁方ハアマリニツヨクフリケレハ物音モ聞ヘズ

五月雨ヤ今朝暁ハ塔ノ沢一　才牛

南北二所望角止絵三ノ扇子瓦竈四ニホトヽギス瓦ヤキノ人形五

ノホトヽギスヲ見テ居ル体

目フル間六ニ浅チ七庵崎八子規　才牛

長十郎九所望朝日ニ夜明烏森十アヤシラヒ画ハ一水十一

顔見勢十二ヤ冨士モツクバモ朝日山十五　才牛

一　塔ノ沢　塔ノ沢温泉。神奈川県足柄下郡箱根町の東部にある温泉。箱根七湯のひとつ。早川が渓流部に湧出し、川瀬の音が大きい。二代目團十郎

歌川広重画「塔の沢」嘉永五（一八五二）年、国会図書館蔵

は享保十八（一七三三）年十月十一日に箱根を旅し、塔ノ沢に泊まった（俳諧集『犬新山家』二代目深川湖十編、享保十八年刊、『資料集成二世市川團十郎』〔和泉書院、一九八八年〕収録）。

二　南北　「道化方鶴屋南北」〔柿〕。役者初代鶴屋南北。生年未詳、元文元（一七三六）年没。道化役。享保十九年、二代目團十郎とともに市村座に出演した（『役者三津物』享保十九年正月刊）。

三　角止絵　俳人角止が描いた絵。角止は連句集『百千萬』（享保十〔一七二五〕年、沾洲編）に五句あるが、正体は未詳。

今戸の瓦竈（歌川広重画「東都名所之内　隅田川八景　今戸夕照」ボストン美術館蔵）

四　瓦竈　かわらがま。瓦を焼くためのかまど。土や石をまんじゅう形に積みあげたもの。すえがま。

五　瓦ヤキノ人形　瓦人形。土を焼いて作った人形。伏見人形、今戸人形、堤人形、古賀人形など。ここでは今戸人形か。

六　目フル間ニ　見ている間に。

七　浅チ　「浅茅」〔柿〕。チガヤ。丈の低いイネ科の多年草。秋風で変色す

ることから、恋人の心変わりにたとえる。

八　庵崎　いおさき。隅田川畔の地名。「庵崎木母寺（現東京・墨田区堤通）の北の方とも、又は請地村秋葉権現（現・台東区）の辺なりともいへり」（斎藤長秋著『江戸名所図会』天保七〔一八三六〕年刊）。

九　長十郎　「川原崎」（ママ）〈柿〉。河原崎長十郎、のち三代目河原崎権之助。生年未詳、安永四（一七七五）年没。二代目河原崎権之助の養子。享保十八（一七三三）年十一月、市村座の顔見世（注十三参照）興行で河原崎長十郎の襲名式を行い、二代目團十郎は長十郎とともに裃姿で襲名の口上を行った。また顔見世興行「正本太平記」で長十郎は女に変装した武将薬師寺伊達次郎を演じ、早変わりや踊り、濡れ場、荒事が評価となった（『役者三津物』享保十九年正月）。享保二十（一七三五）年、森田座の控櫓として河原崎座を再興し座元となる。

十　烏森　現東京・港区新橋。もと新橋南地とよばれた花街で、烏森神社（旧烏森稲荷）がある。

十一　アヰシラヒ　あいしらい。受け答えすること。また取り合わせること。

十二　一水　俳人。生没年未詳。俳書『本たわら』（延享二〔一七四四〕年）を編んだ。

十三　顔見勢　顔見世。劇場年中行事のひとつ。江戸時代の歌舞伎劇場は毎年十一月に翌年出演する役者による座組で開場された。一年のうちもっとも重要な興行であった。ここでは享保十八（一七三三）年十一月、河原崎長十郎が二代目團十郎と共演した市村座の顔見世興行「正本太平記」を指す。

十四　ツクバ　筑波山。茨城県にある山。歌枕。恋。山頂が男体山・女体山の二峰に分かれ、また歌垣（古代、春と秋に男女が集まり、互いに歌をうたいかけ合ったり、踊り合って楽しんだり、求愛・求婚したりした行事）として有名であった。

十五　朝日山　歌枕。京都府宇治市にある山。十四世紀の軍人赤松円心がここで敗北する（『太平記』題一六巻「赤松円心白旗城を構へる事」）。また謡曲『頼政』では、ここで源頼政が自害する。

解説

二代目市川團十郎が座頭を務めていた市村座に出演していた初代鶴屋南北と初代者河原崎権十郎が二代目團十郎に揮毫を依頼する。

〈句意〉（なんと強く降る）五月雨だろうか、今朝の暁は（まるで川の流れがうるさい）塔ノ沢（温泉にいるようだ）才牛

初代鶴屋南北が、ほととぎすが瓦窯にとまり、瓦焼人形がそのほととぎすを見ている画が描かれた扇子に揮毫を求めた。

〈句意〉（船に乗って隅田川を下ると）浅茅（の景色から）あっという間に（瓦窯のある）庵崎（にやってきたが、その間ずっと）、ほととぎす（が鳴いていた）

河原崎長十郎は一水が描いた朝日に照らされた夜明けの烏森神社の絵に賛を求めた。

〈句意〉未詳。二代目團十郎が長十郎の襲名式の口上を務めたことから、祝いの句か。このときの演目「正本太平記」に朝日山の場面があったかは未詳。

▽つゝみの長市[一]〇市」左衛門所望　沾徳の点じめに[二][三]
朱硯[四]や水を待間の仙翁[五]［▼水仙[六]］花　才牛

一　つゝみの長（市）［〇市］左衛門　「鼓ノ市左衛門」〈柿〉、「京伝傍注『本のママ』」〈老郡〉。市村座の囃子方か。
二　沾徳　「水間沾徳」〈老郡〉。俳人水間沾徳、寛文二（一六六二）年生、享保十一（一七二六）年没。はじめ門田氏、のち水間氏。名は友兼。別号に沾葉、合歓堂がある。はじめ岸本調和門の福田調也に学び、随伴して内藤風虎の江戸藩邸に出入りした。榎本其角と長く提携する。処女選集『俳林一字幽蘭集』元禄五（一六九二）年刊。
三　点じめ　俳諧の会の際、点者（師匠）が参加者の句の点数を記した帳簿。
四　朱硯　朱墨をする硯。
五　仙翁　ナデシコ科の多年草。中国原産で、古くから観賞用として栽培され、夏から秋にかけ深紅色の五弁花をまばらに開く。漢名、剪紅紗花。季・秋。
六　水仙　ヒガンバナ科の多年草、スイセン属植物の総称。十二～一月頃、一～数花が咲く。色は黄色または白。季・冬。

解説

〈句意〉朱墨をする硯は水を待つ仙翁花（のように紅い）朱墨をする硯を仙翁花にたとえるが、仙翁は沾徳本人も指すか。

日記本「市川團十郎日記発句集」▼では「仙翁花」を「水仙花」とするが、水仙花の花は黄または白なので、誤記であろう。

〇五月下旬　闇礫[一]丈ヨリ扇子四本来ル
発句所望
ホトヽキス真白ニ渠[二]ハ烏ノ新樹

一　闇礫　未詳。貞山編『闇礫抄』（関口甚四郎版、島崎鳥山跋、寛保元（一七四一）年刊、新日本古典籍データベース）と関わるか。丈とあることから、武士または年配の俳人か。
二　渠　なんぞ、なに、いずくんぞ、かれ（三人称の人代名詞）みぞ。

解説

〈句意〉未詳。ホトトギスの胸の白い羽には黒い模様がある。新樹に留まる鴉とすることは可能だが、ホトトギス

の姿が詠まれる句はほとんどない。

○人参ノ目利[一]　本人参ハヨコニ巻筋ロズ小シセイネイト[二]云物ヨク似タル者也　熊ノ丰[三]正真ハ至極苦キ内ニ至極アマミ有　アマミナキハ似セ也　右丹治玄庵老[四]ノ口伝也

一　目利　ものの真贋・良否などを見わけること。鑑定。また、

二　セイネイ　薺蓼、えぐさ。荏胡麻。シソ科の一年草。

三　熊ノ丰　熊胆。胆汁を含んだまま、熊の胆嚢を干したもの。味は苦く、主に胃腸薬として用いられる。

四　丹治玄庵老　未詳。

解説

享保期中、漢方薬に用いられる朝鮮人参などの植物は国内でも栽培されるようになったが、一方で偽物の販売が増えた。[1] この記述も二代目團十郎の養生への関心の高さを示す。[2]

1　長崎ではニンジンの密輸事件が多発し、またニンジンの国内栽培は享保期に始まった（羽生和子著『江戸時代、漢方薬の歴史』清文堂、二〇一〇年）。

2　前出享保十九年五月二十一日〇第六回参照。

▽白誉[一]単然直道大徳俗名松本小四郎[二]　享保十五庚戌天三月廿五日[三]

一　白誉　「高安本『貞誉……』」〈老郡〉。ここで郡司正勝は「貞誉」とするが、他の日記本では白誉となっている。

二　松本小四郎　「俳名男女川。初代松本幸四郎。五十七歳で没」〈老郡〉。初代松本幸四郎は、延宝二（一六七四）年生、享保十五（一七三〇）年没。幼名小四郎。享保元（一七一六）年、幸四郎と改名。実事、荒事、武道事を得意にした。

三　三月　「高安本『五月』」〈老郡〉

解説

二代目團十郎は頻繁に歌舞伎役者らの死を悼む。享保十五（一七三〇）年刊、二代目團十郎が編集した初代團十郎の二十七年追善俳諧集『父の恩』にも、坂東又太郎ら歌舞伎役者六十六名の没年と追善句が記されている。

この記録は日記本『柿表紙』〇が記録された享保十九（一七三四）年より四年前のもの。二代目團十郎がふと思

い出して書き記したか。

〇廿八日　中村座曾我祭スル迚[一]　コトヲタクミ過　夜二入桟敷三百文ツヽ切落ノ見物一人廿四文ツヽ二人ヲ入口論出来ニワカニヤメニナリヒソカニシマヒ　翌日皆人々笑フコトニ成ヌ

一　曾我祭　近世期、江戸の各劇場で行われた年中行事のひとつ。初春狂言の曾我ものが当たり、興行が五月まで継続すると、曾我兄弟の討入りが行われた五月二十八日に祝いの会を開いた。元は楽屋で行われたが、宝暦三（一七五三）年、中村座で初狂言「男伊達初買曾我」大成功の際に舞台で行われ、以後文政ごろまで続いた。仕切場に神輿みこしを飾り、幕間に神楽を奏し、楽屋では打出し後酒宴、さらにさまざまな余興を演じて町内を行列した。贅を尽くし華美になったため、しばしば幕府の弾圧の対象となった。

二　迚　とて。「として」の意の接続詞。

解説

享保十九（一七三四）年、中村座の初春興行「十八公時勢曾我」が大当たりしたため[1]、曾我祭が開催された。この頃の桟敷席の平均入場料は一貫三十文（千三十文）、切落や土間席は百六十四文[2]だったので、このときの入場料三百文／二十四文は格安だった。入場料が安価だったため、多くの観客が詰めかけただろう。

これまで宝暦三（一七五三）年ごろから曾我祭が舞台上で行われたとされてきたが、すでにその二十年前のこのとき、舞台上で曾我祭が行われた。

1　「十八公時勢曾我」は正月から七月まで続いた（土田衛編『歌舞伎年表』補訂考証」享保編其五、『演劇研究会会報』第三四号、二〇〇八年）。

2　享保期、入場料は日々の予約数によって決められ、変動した。拙著『二代目市川團十郎の日記にみる享保期江戸歌舞伎』文学通信、二〇一九年、第五章「享保期江戸歌舞伎の劇場経営」参照）。

〇廿九日小朝ヨリ小雨小モ止ナシ　八月頃ノ如クノ雨風也　扨々[一]不正ノ天気也　予ハ着ル物三ツ着ス　昨夜ハ手前座[二]モ曾我祭何江[三]丈モヨフシ　来年キトフ[四]ノ為シユビヨクミナ々酒ノミアソブ　予ハ酒ガイヤニテ内ヘモドリ不行　七ッ七ッ[ママ]前　母人[五]キゲンヨク目黒[六]ヨリ御出也　廿九日ハ七ッ頃大雨風モ有終夜フキブリ

十郎の日記にみる享保期江戸歌舞伎』文学通信、二〇一九年、第五章「享保期江戸歌舞伎の劇場経営」参照)。

翌朝晴天

一　扨々　さてさて。困惑・驚嘆したときなどに発する語。

二　手前座　ここでは、このとき二代目團十郎が出演していた市村座を指す(後出享保十九年八月二十日〇参照)。

三　何江　市村座座元八代目市村羽左衛門の俳号。享保十九年正月二十七日▽第一回参照。

四　キトフ　祈禱。

五　母人　二代目團十郎の母お戌。享保十九年正月六日▽第一回参照。

六　目黒　目黒にあった二代目團十郎の別荘。二代目團十郎の母が住む。享保十九年正月二十七日▽第一回参照。

解説

中村座は曾我祭を入場料を取って舞台上で行ったのに[1]対し、二代目團十郎が座頭を務めた市村座では、慣例とおり楽屋で行われた。二代目團十郎は普段はよく酒を飲んだが、[2]このとき曾我祭には参加しなかった。

1　享保十九年五月二十八日〇第六回参照。

2　二代目團十郎は毎晩、食後に熱燗二〜三合を飲んだ(池須賀散人著『市川栢莚舎事録』明和六〔一七六九〕年)。また、酔って下駄を踏み外したり(享保十九年正月二十七日▽第一参照)、平戸藩藩主松浦篤信邸の玄関先で寝こんだりした(享保十九年十月二十三日〇)。拙著『二代目市川團